
スノーマン

望月 霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スノーマン

【NZコード】

NZ8911

【作者名】

望月 霞

【あらすじ】

冬のある日、人形たちが歌つたり飛んだりしていた！？
そんなはずはない、と思う大人たち。しかし事実だったことに大騒ぎになる。

これはたしかに存在する、雪の妖精たちの物語。

「ここはとある世界のとあるところだ。」これが世界のどの辺りにあるのか、この地の名前すら、誰も知らない。だが、外地に住んでいる人間がたまたま偶然に見かけたのは、いつのころかのクリスマスであった。

「パパーッ！！ あっちにね、かわいいお人形さんがいたのーっつーーー！」

「お人形？ こっちの店じゃなくてかい？」

「ちがうのーっ！！ お人形さんがね、なによくおうたをうたつてたんだよっつーーー！」

……人形が歌を歌っている？ どういふことなのだろうか。一応、子供に話を聞いてみるが、どうも言っていることがおかしい。何故ならば、着ぐるみや操り人形ではなく、“本物の人形”が動いているらしいのだ……。と言つても、どうせ子供の言つことである。信じる大人など、誰ひとりとしていなかつた。ここで誰かが好奇心に任せて様子を見てきていれば、彼らの気まぐれな外出に付き合えたかもしぬなかつたのに。

「ふんふふーんふふんつ
「くるるくつくるーんつ
「ぴーちちぴちぴつぴつ」

と、木の人形とわらの人形、そしてぬいぐるみなど、様々な人形が集まり輪を作つて歌を歌つてゐる。人形によつて話す言葉が違うので、音程はあつていても、はたから聞いたらただの雑音にしか聞こえなかつた。だがもちろん、これらはただの“人形”である。誰かが操つて遊んでいるのだ。と言つても、人形に糸が

かかっているわけでも、背中にゼンマイがあるわけでもなかつた。では、いつたいどのようにして人形が動いているのだろうか？

……答えはこうである。

「おもしろいっち！ 一ソングンってこんな物を作つているんちねーーー！」

「かわいいいっち！ どうやつたら作れるんちね？」

「ニンゲンは火を使うから、オレッちたちには作れないっち……」

「これは火を使わないっちよ？ ボクらでも作れるっちーーー！」

と、語尾にヘンななまりがある、独特的話しかたをする何か。見てみると何と雪ダルマである！ 雪ダルマが話しているのだ！！

「でも、オレッちたち。 外界に遊びに来たことがバレたら氷付けにされるつちー！」

「いやいや、そんなもんじゅすまないっちよー！ もうと頭を持つてかれちまうつちさ……」

「大丈夫っち！ 外界には誰も来ないっちつーーー！ だからバレないっちよつつーーー！」

「そうそつっち！ 思う存分遊ぶつちーーー！」

と、4体の雪ダルマがそれぞれ言つ。 よく見ると、顔は同じであるが、それぞれ違う特徴があつた。 それは、普通の雪ダルマにはおそらくついていないだろう、人でいう背中と思われるところにある“羽”である。“ピクルの羽はいっちね！ ボクもその色がいっちーーー！”

と、ひと際元気そうな、緑色の羽を持つた雪ダルマが言つ。

「そおーっちか？ ピクルはケイシャの羽の色がいっちーーー」と、ピクルと名乗る、赤い羽根を持った雪ダルマは、自分に向かつて言つた雪ダルマ ケイシャに言つた。

「ねえねえ！ この人形にも羽をつけてみるっちよーーー！」
と、遊び心でいっぱいの雪ダルマ ヨークが言つ。 この雪ダルマの羽の色は、澄み切つた空のような水色である。

「羽？　どうやつてっち？？」

と、薄紫色をした羽をした雪ダルマが言つ。　この雪ダルマは、どうやら好奇心旺盛のようで、ヨークが行つている作業を、じーつ、つと眺めている。

「大したことないっち。　ただ、これで羽をつけてあげるだけっちよ、キララ」

といふ返事を、キララにした。　そのように言われたキララは、頭を少し右回りに動かして、よくわからない、といった行動をとつた。

「ピクルー！　ケイシャー！　その人形も持つてきてっちーつ！」

「わかつたっちーつ！！」

と、ヨークは羽をパタパタさせながら、2体の友達に頼んだ。その間、ヨークは何やら準備をし、キララはその辺で、ボヨーンボヨーン、と跳ねて遊んでいる。その数10秒後、ヨークは180度に顔を回し、

「準備できたっちよーつ！！！」

と、ジャンプしながら楽しそうに皆を呼んだ。　呼ばれた3体は、ヨークの元へと集まり、何やら相談をしている。……はてきて、これから何が始まるのだろうか？

「……………」

「……………」

「へええ～！　これでボクたちが生まれたんでもっち！」

「そうそうっち！　だから、これをつければこの人形たちもオレっちたちの仲間入りっち！！！」

「いいつちねーっ！　ぼくっちも賛成でっち～！！」

「ボクもっち～！」

「ピクルもっち～！」

と、キララ、ケイシャ、ピクルの順で元気な返答を返す。

新しい遊びをするために、4体は準備に取りかかった。それは、ここに持ってきた人形たちを彼らの仲間に加えて独自の遊びをする、

とこうものらしい。まずは、彼らの象徴である“羽”を人形たちにつけてあげた。つけかたは至って簡単で、まだ命を吹き込まれていないそれを背につける、というものだ。

「さてつと！つけ終わつたつちかー！？」

「ヒーッちは終わつたつちよー！！」

「ヒーッちもつちー！！」

「〇Ｋつちー！じゃあ、始めるからヒーッちにきてつちー！」

ヒ、ヨークは皆に向かつて叫んだ。それを聞いたピクルたちは、急いでヨークのところへと急ぐ。全員がそろつたのを見たヨークは、何かをつぶやく。すると、ヨークが何かを言い始めてから、辺りが白い光がほのかに色づいていた。だんだん、雪のような光が多くなつていき、しまいには周りが見えないぐらいの量になる。だが、次の瞬間、光の結晶は、ぱあつ、つと飛び散つてしまつた。

「あ～あ、キレイだつたつちのに……」

「ぬひひ、真ん中を見てみるつちー！」

「あーつー！」

「ど、どうなつてるつちーつー？」

と、ケイシャとキララがほぼ同時に叫ぶ。空を見ていたキララが、何かと思つて見てみると、

「に、人形が空を飛んでいるつちーつー！」

「ああさあ、オレつちたちもいくつちよー！」

と、ヨークが最初に空へと旅立つ。目的は当然、空に浮いている人形たちだ。呆然と見ている3体に向かつて、ヨークは、

「何してるつちー！早く空で遊ぶつちー！」

と、短い腕をぶんぶん振りながら、3体に呼びかけている。はつと我に返つたピクルたちは、あわててヨークの後を追つた。

空に広がる色とりどりの羽は、中心から外れたところから見れば幻想的で、不可思議な空模様だった。ただ、その中に繰り広げられていることはいたつて普通のことであった。

「わーいっ！！ 楽しいいっちーっつ！！」

「これはいいっち！ ……うわーっ、人形たちの羽がキレイだつちねー！！」

「ねえねえっち！ ここから『マチ』って近いっちか？」

「近いっちよ。 どうしたっち？ キララ」

「この人形たちは返さないといけないっち……。 だから、ごめんなさいって意味で、このまま行かないっちか？ きっと、ニンゲンたちも喜んでくれるっちよ！」

「それはいい考えっち！ ジャあ、ちょっとくら行つてみるっちー！」

おおーっ！ と、キララの提案に、全員が賛成した。

……本来ならば、人間に姿を見られてはいけないのだが、彼らの場合生まれ間もないところから、そのあたりのことが理解できていない。 この後が大変である。 まあ、それが幸と出るのか不幸と出るのか、何ともいいようがないのだが。

だが、彼らの空の旅は人間たちがたくさん住んでいる町の上で終わつた。 というのも、大人たちがかけつけてきて、彼らを強制送還したのだ。

「何考えてるっちか！ ニンゲンに姿を見られなかつただけでもよかつたっちが……」

「あれほど外に出てはいけないって言つたでちつー！ もしかしたら、溶けてなくなつていたかもしれないでっちつー！！！」

「大体、他雪ダルマ様ならず他人様のモノを勝手に持ち出すなんて、そんな風に固めた覚えはないっちよー！」

「こんな魔法まで持ち出して！ 人形を飛ばす以外に使ってないでつちねつ！？ 使つてないでつちねつ！？？」

あうづ……、とキララ、ケイシャ、ピクル、ヨークの4体は、親たちから野次の台風を受けていた。いや、雷暴風、言つたほうがいいかもしない……。

「まあまあ、待てつち

と、しおれた声が部屋に聞こえる。ふとそちらのほうを見てみると、ひとり大きな帽子をかぶつた、大きな雪ダルマがいた。大きい雪ダルマは、帽子をつかみながら、

「やつてしまつたものはしようがないつち。 その辺でやめたらどうつち」

「そうそうつち！ カわいい子供のイタズラつちつ！？」

「そうそうつち！」

と、4体。しかし、それ以上は親雪ダルマたちの視線で阻まれた。すると、大きい雪ダルマは、

「そうかそうか。では、こちらも“カワイ～おちおき”をするとしようつかのつち

「つ！…！」

…………そのあと、彼らの悲痛な叫び声が響き渡つたことは言つまでもない……。

この後、人間たちの町は人形が返つた家では大騒ぎになつていた。人形が歌つたり空を飛んだり等、誰の仕業かつきとめようと、テレビ局まで出てきた始末だ。しかし、結局のところはわからず、そのうち人々の間から薄れていった。

それ故なのか、後にこう言い伝えられるようになる。

精

・
クリスマスの時季、人形が勝手に動き出すのは
“スノーマン”の仕業であると。

“雪の妖

(後書き)

当作品を読んでくださり、誠にありがとうございます^ ^
前作からかなり時間が空いたあげくに、新作じゃないですけど

今回も楽しんでいただけたら幸いです。

またあなたにお会いできる日を、心待ちにしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3891j/>

スノーマン

2010年10月28日04時48分発行